

山と博物館

「山と博物館」は自治会などを通じ全戸配布されるほか、市役所および関連施設で配置配布しています。また博物館公式 Web からご覧いただけます。

2026
夏号
第71巻 第2号

無料
Free

表紙の1枚 1
・ ユリ属植物の花粉を運ぶ昆虫たち
さんぱく研究最前線 2・3
・ 飼育下のライチョウの摂取量と体重の変化
企画展特集 4・5
・ 企画展「ライチョウの野生復帰大作戦 令和6・7年度の取り組み」

展示・イベントのご案内 6
博物館のひろば 7
人事異動のお知らせ／山博友の会だより 8
・ 総会記念講演会
・ 博物ハイキング ー木崎湖編ー



ユリ属植物の花粉を運ぶ昆虫たち

千葉 悟志

湿原などに咲くコオニユリ(図-A)や海に面した岩場などに咲くスカシユリ(図-B)には、昼行性のアゲハチョウ類が訪花します。一方、中部地方以西に生育するササユリ(図-C)の花には夜行性のスズメガ類などが訪花します。

ユリ属植物を研究されている林一彦氏(大阪学院大学名誉教授)によれば、ヤマユリ(図-DとE、同氏提供)には、昼間はアゲハチョウ類とスズメガのなかまのクロスバホウジャクが、夜間はスズメガ類などが訪花するとのこと。同じユリ属植物でも、相手にする鱗翅目が異なるのはどうしてなのか興味深いところですが、林氏は、さらにササユリのように海拔数メートルから2000メートルの山域に生育する種では、地域ファ

ウナの影響を受けて鱗翅目のみならずマルハナバチ類やハナムグリ類がササユリの受粉に関与すると考えられ、それは訪花昆虫を誘引していると考えられている花香がササユリの場合、地方によって花香構成成分が異なることから(大久保と大石, 2012, 林, 2024)、訪花昆虫の多様性が同われるとのこと。

みなさんの地域のユリ属植物にはどのような昆虫が訪花するのか調べてみると、そこには、新たな発見があるかもしれません。(市立大町山岳博物館 学芸員)

【引用文献】

大久保直美・大石勝彦, 2012. ユリ野生種の香りに関する研究(第2報) ササユリの香氣成分の解析. 園芸学研究 11(1): 206.
林 一彦, 2024. ユリ科 生薬・食用・花香・祭事・薬効. ユリ協会 NEWS 36:21-38

- ◆市立大町山岳博物館は付属園を含め、月曜日と祝日の翌日が休館です。ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館となります。このほか、年末年始は休館となります。
- ◆開館時間は次の通りです。4～11月：午前9時～博物館：午後5時(入館は午後4時30分まで)・付属園：午後4時30分(入園は午後4時まで)、12～3月：午前10時～博物館・付属園：午後4時(入館は午後3時30分まで)。
- ◆毎月第3日曜日の「家庭の日」とその前日の土曜日は、「大町市民無料開放デー(長野県民割引)」として、大町市民の方は観覧料が無料です。また、この日は長野県民の方も団体割引料金で観覧いただけます。今季の該当日は7月18・19日、8月15・16日、9月19・20日です。この機会にぜひご来館ください。
- ◆次の方は通年、いつでも博物館を無料で観覧いただけます。《障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名/未就学児/大町市内小・中学校に通う児童・生徒/大町市在住の高校生/大町市在住の65歳以上の方》このほかにも観覧料の各種割引があります。詳しくは受付窓口でお尋ねください。



博物館施設案内
はこちら

飼育下のライチョウの摂食量と体重の変化

岡本 真緒

みなさんは、飼育しているライチョウは普段何を食べていると思いますか？ 当館の成鳥は、配合飼料（約40g）、小松菜（約60g）を毎日の主食として生活しています。配合飼料は当館や大学研究機関等による試行錯誤のもと開発され、現在に至っています。それでは、環境省の事業によって中央アルプスへ野生復帰をした雛は、何をどのくらい食べていたのでしょうか？

本稿では、2025年に当館から中央アルプスへ野生復帰した雛3羽の餌と体重の変化について紹介します。

野生復帰のための餌について

2013年に環境省が乗鞍岳で実施したケージ保護において、野生の雛が母鳥の糞を食べる様子が確認されたことをきっかけに、野生のライチョウのお腹の中にいる「高山植物を消化するために必要な腸内細菌」が母鳥から雛へ継承されていることが明らかとなりました。飼育下のライチョウを野生復帰するには、飼育下の雛にこの「高山植物を消化するために必要な腸内細菌（＝野生型の腸内細菌）」を定着させる必要があります。そこで中部大学によって研究が進められ、野生のライチョウの盲腸糞から作られた、野生型の腸内細菌を含んだ粉末が開発されました。この開発により、飼育下の雛の腸内へ、野生型の腸内細菌を届けることが可能になりました。しかし、これだけでは腸内細菌を維持することができません。粉末の投与に加えて、高山植物を給餌することで、この野生型の腸内細菌を維持することができるということも明らかになりました。

このことから、雛たちには野生ライチョウの盲腸糞からできた粉末と高山植物と一緒に食べるという給餌方法による飼育が行われることになりました。

しかし、高山帯での高山植物の採取は脆弱な高山植生に影響を与えかねないため、雛が満足できるほどの量を給餌できません。そこで、当館では限られた量の高山植物と併せて、3種類の配合飼料を雛が食べられるサイズにしてブレンドしたものと小松菜、さらに虫餌としてコオロギやミルワームを給餌しました。

調査の方法

給餌した餌の中で、高山植物（複数種を束にしたものなど）・配合飼料・小松菜について、人工孵化した3羽を対象に、31～66日齢までの間に雛が食べた餌の量を記録し、1羽あたりの摂食量を算出しました。体重測定は、毎日1回行いました。



写真1 配合飼料



写真2 高山植物



写真3 小松菜

結果

各餌の雛1羽あたりの摂食量の変化は図1のとおりです。雛1羽あたりの平均摂食量は、小松菜は84.2g、配合飼料は55.3g、高山植物（高山植物の束・極刻み）は22.4gとなりました。前述の飼育下の成鳥と比べるとたくさんの餌を食べ

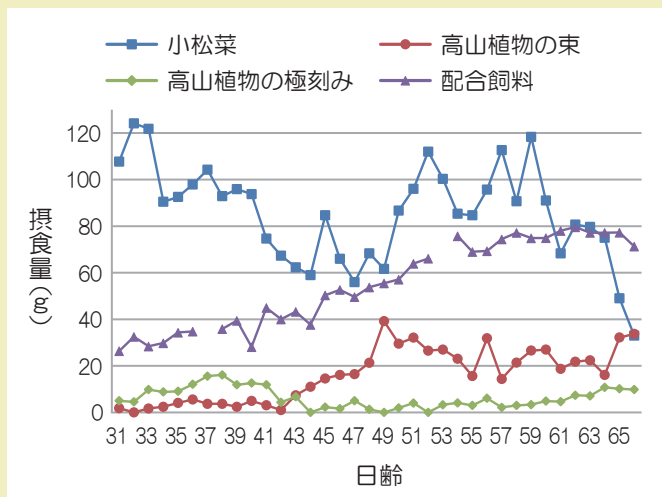


図1 各餌の雛1羽あたりの摂食量の変化

ていることがわかります。また、飼育下の雛は、生まれたばかりの体重は16～20g程度しかありませんが、2ヶ月後には360～380g程度にまでなるため、たくさんのエネルギーを必要としていることがわかります。1羽あたりの高山植物の摂食量は平均22.4gで、小松菜や配合飼料の量と比べると少なかったのですが、中部大学が行った野生型の腸内細菌が定着しているか否かを調べる検査では、目標値に達していました。高山植物は環境省が現地から採取したものや白馬五竜高山植物園が栽培したものなどを提供いただき、給餌しました。貴重な高山植物をどのように、どの程度の量を給餌すればいいかという点は手探り状態で行いましたが、他の餌と比べて少ない量であっても、腸内細菌を定着させられることがわかりました。しかし、ライチョウの腸内細菌と高山植物の関係はまだまだ分からないことが多いです。高山植物にも様々な種類があるため、今後は高山植物全体として調べるのではなく、種ごとや含有成分などに着目して腸内細菌との関係性を詳しく調査する必要があります。

次に雛3羽の体重の変化について図2に示しました。3羽とも体重は右肩上がりに増加していくことがわかります。31日齢時は平均140gでしたが、66日齢時には平均420gにまでなり、約3倍となりました。野生下では50日齢頃に300gほどになることが知られています。飼育下の雛たちは、やや下回る平均273gに成長していました。

おわりに

2025年に実施した方法で飼育した雛たちは、順調に成長し、放鳥前のチェック要項でも問題がなかったことから野生復帰することができました。そして、野生復帰1ヶ月後の調査で生存個体が見つかったことから、現地の餌を食べて生活することができていたと推察されます。その後の調査結果はまだ届いていませんが、前年度に実施した野生復帰において、当館の個体が春以降の調査で発見されなかった前例があることから、無事に越冬できるかどうかは課題の一つと言えます。今後、野生復帰を再度行うことになった場合には、野生復帰後の生存率を高くするため、当館の飼育方法を見直す必要があるかもしれません。

環境省による中央アルプスへの野生復帰事業は、2025年度で一旦終了となりました。今回の野生復帰事業を進めるなかで、当館では今後の野生復帰を行う際に参考となる資料にしたいと考え、飼育下での摂食量や体重の変化などを記録しました。このような野生復帰を前提とした給餌方法は前例が少なく、今後、当面の間は実施されないかもしれませんが、いつかこの記録が野生復帰の資料の一つとして活用され、野生復帰後も元気に生活できるライチョウを育て上げる一助となれば幸いです。

(市立大町山岳博物館 学芸員)

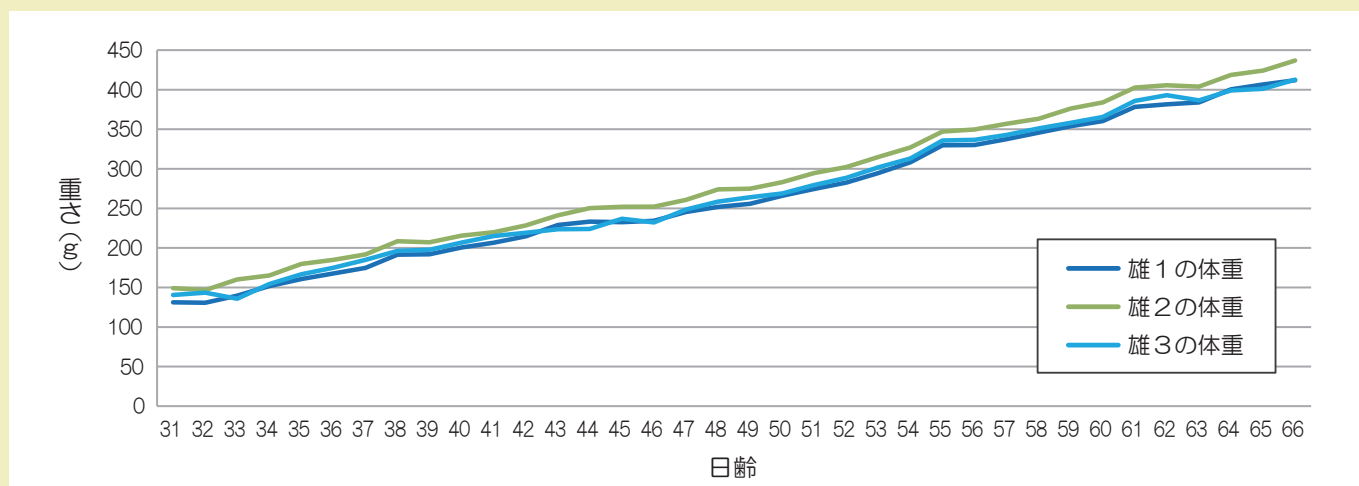


図2 雛3羽の体重の変化

会期 令和8年9月19日(土)～12月20日(日)

市立大町山岳博物館 令和8年度企画展

「ライチョウ野生復帰大作戦 ー令和6・7年度の取り組みー」

展示解説文の主な執筆者

環境省信越自然環境事務所 生息地保護連携専門官	福田 真 さん
中部大学 卓越教授	牛田 一成 さん
中部大学 准教授	土田さやか さん
大阪公立大学大学院 教授	松林 誠 さん
信州大学名誉教授	中村 浩志 さん
当館学芸員	岡本 真緒

会 期：9月19日(土)～12月20日(日)
時 間：9～11月 午前 9時～午後5時
12月から 午前10時～午後4時

主 催：市立大町山岳博物館
後 援：環境省信越自然環境事務所、日本動物園水族館協会

概 要

山岳博物館では、付属園で1963(昭和38)年からライチョウの飼育を開始しました。当初からの目的の一つとして、野生復帰のための飼育技術開発が掲げられていましたが、61年もの間、野生復帰には至っていませんでした。

中央アルプスのライチョウは、1969(昭和44)年の目撃を最後に絶滅したとされていましたが、2018(平成30)年に1羽のメスが確認されたことをきっかけに、環境省によって中央アルプスにおいてライチョウを復活させる事業が開始されました。ライチョウは現在、環境省レッドリストにおいて絶滅危惧種ⅠB類に選定されていますが、生息地点数を現在の5箇所から6箇所に増やすこと、つまり中央アルプスの個体群が復活すれば、絶滅のリスクが低減し、絶滅危惧種Ⅱ類への引き下げ(ランクダウン)に向けた大きな一歩となります。

また、2013(平成25)年に乗鞍岳で実施された

ケージ保護において、野生の雛が母鳥の糞を食べる様子が確認されたことをきっかけに、“高山植物を消化するために必要な腸内細菌”が母鳥から雛へ継承されていることが明らかとなりました。さらに母鳥の体の中で増えた“野生のライチョウの消化管に寄生するアイメリア原虫”に雛が感染することもわかりました。これにより、ライチョウや野生環境に悪影響を与えないようにするため、この野生下の状態に飼育下のライチョウを近づけることが野生復帰には必要だと考えられました。

そこで、研究者たちによって飼育のライチョウを野生復帰できる状態にするための研究や技術開発がなされました。そして日本動物園水族館協会(JAZA)加盟飼育施設がこの技術を取り入れ、各関係機関が連携しながら中央アルプスへ野生復帰できる個体の創出を試みました。このような様々な取り組みの結果、2024・2025(令和6・7)年度に日本で初めて、飼育下のライチョウを人工繁殖し、中央アルプスへ野生復帰するまでに至りました。

本展では、環境省が主導した2024・2025（令和6・7）年度の中央アルプスにおけるライチョウの野生復帰事業において、大学研究機関が行った研究や計8羽の雛が野生復帰するに至った当館の飼育を中心に、雛が放鳥されるまでの道のりについて展示します。ぜひご覧ください。

展示内容

第1章 野生復帰作戦開始までの道のり

中央アルプスにおけるライチョウの野生復帰事業は、2018（平成30）年にライチョウが絶滅したとされていた中央アルプスにおいて、1羽の雛が発見されたことから開始されました。それでは、動物園で飼育されている雛たちが野生復帰するまでに、どのような取り組みが行われていたのでしょうか？ この章では、野生復帰に至るまでの困難や2024・2025（令和6・7）年に実施された野生復帰の概要について紹介します。

第2章 飼育系統のライチョウの野生復帰の課題と研究

2015・2016（平成27・28）年に野生から卵の状態を導入し、飼育下で孵化した個体の系統を、2024・2025（令和6・7）年に初めて野生復帰しました。飼育下のライチョウを野生復帰するには、野生のライチョウのからだと同じ状態に近づける、つまり野生型腸内細菌の定着とアイメリア原虫の軽度感染が必要であると考えられました。これを解決するために取り組んだのが大学研究機関です。この章では、技術開発にあたった各大学機関の取り組みについて紹介します。

◆腸内細菌

動物にとって腸内細菌とはどのような存在なのでしょう？ 野生のライチョウと飼育のライチョウとでは腸内細菌にどのような違いがあるのでしょうか？

ライチョウと腸内細菌の密接な関係や飼育下のライチョウの腸内環境を野生下のライチョウに近づけるまでの取り組みなどについて紹介します。

◆アイメリア原虫

アイメリア原虫は、消化管に感染する寄生虫です。このアイメリア原虫を野生復帰時に飼育下の雛に感染させましたが、なぜ雛たちは悪影響を受けなかったのでしょうか？ ライチョウとともに生きてきた謎めいた生き物「アイメリア原虫」について詳しく紹介するとともに、雛に感染させるまでの過程について紹介します。

第3章 いざ、実践！

各研究機関の研究成果を活用し、ライチョウ飼育施設で繁殖したライチョウを野生復帰させるための飼育が行われました。この章では、飼育施設の取り組みとして、当館での取り組みを紹介するとともに、野生復帰の候補個体と認められたライチョウたちが放鳥されるまでに現地に設置されたケージ内で過ごした7～10日間の生活や放鳥後の調査などについて紹介します。

第4章 ライチョウのこれから

2025（令和7）年度で、中央アルプスへのライチョウの野生復帰は終了しました。現在、中央アルプスのライチョウはどのくらい生息しているのでしょうか？ また、これからの保全の取り組みはどのように進められていくのでしょうか？ この章では、中央アルプスにおけるライチョウの現状とこれからの見通しに加え、環境省によるライチョウ保護増殖事業の展開や、当館における今後の域外保全の取り組みについて紹介します。



ぼくたちが野生復帰するまでの間に、こんなにたくさんの取り組みが行われていたんだね！

◀当館飼育中だった頃の雛（1日齢）

企画展関連催し

企画展記念講演会

期日：10月10日（土）午後1時～午後4時30分

会場：サン・アルプス大町（大町市）

講師：環境省信越自然環境事務所 生息地保護連携専門官 福田真さん、中部大学環境生物科学科 准教授 土田さやかさん

対象：どなたでも・無料

申し込み：参加ご希望の方はEmail・FAX・電話、または直接当館へお申し込みください。お申し込みの際はお名前、ご住所、ご連絡先お電話番号をお知らせください。

ミュージアムガイド&ライチョウ観察会

期日：10月11日（日）10時～・14時～

12月 6日（日）10時～・14時～

会場：山岳博物館特別展示室 及び付属園

申し込み：不要・通常の入館料が必要です。

展示・イベントのご案内

特別展 ボタニカル・フォトアートで見る 雑草の機能美

作者である いがり まさし さんの作品を通じて、カタチから、雑草の生活戦略、繁殖戦略、ひいては自然のシステムの奥深さを紐解く機会につながる特別展です。見どころは、春号（第71巻第1号）をご参照ください。

- 期間 令和8年7月4日（土）～9月13日（日）
- 時間 午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
- 会場 当館 特別展示室
- 費用 通常の観覧料（常設展と共通）が必要です。

特別展 関連催し

ミュージアムトーク

作者の、いがり まさし さんが解説します。

- 期日 令和8年7月4日（土）
- 時間 午前10時～・午後2時～（2回）
- 会場 当館 特別展示室
- 費用 通常の観覧料（常設展と共通）が必要です。
- 申し込み 不要

ワークショップ ～さんぱくこども夏期だいがく～ 「ボタニカル・フォトアート」スマホアプリで 簡単作成術！

いがり まさし さんを講師に、スマホのアプリを使って作品を簡単に作製する体験をしてみましょう。

- 講師 いがり まさし さん
 - 期日 令和8年8月11日（火・祝）
 - 時間 午前10時～正午
 - 会場 当館 講堂と博物館周辺
 - 対象 小学生とその保護者
 - 費用 参加費無料
 - 申し込み 要事前申込（受付開始日：7月4日（土）～）
- ※事前にご自宅で必要なアプリ（無料）をインストールしていただきます。iOS、Androidいずれも可。スマートフォンでもタブレットでもかまいません。PCは基本的に不可。

特別展の申し込み・問い合わせ先

市立大町山岳博物館

電話：0261-22-0211
FAX：0261-21-2133
Eメール：sanpaku@city.omachi.nagano.jp

自然ふれあい講座

みんなで温暖化ウオッチ ～セミの抜け殻を探せ！ in 大町～

当館では毎年、長野県環境保全研究所と共催で「自然ふれあい講座」を開催しています。この講座では、地球温暖化が身近な自然にどのような影響を及ぼしているのかを知るために、セミのぬけ殻を探し、その種類や数を調べます。毎年同じ場所で調べ続けることで、自然の変化がみえてきます。その変化から地球温暖化の地域への影響について考えます。夏休みの自由研究の活用もできますので、ぜひご参加ください。

- 主催 長野県環境保全研究所
- 共催 市立大町山岳博物館
- 期日 令和8年8月8日（土）
- 時間 午前10時～正午
- 集合 市立大町山岳博物館
- 会場 山岳博物館周辺・大町公園周辺
- 対象・定員 主に小学生・20名（先着順）
- 参加費 無料
- 持ち物 飲み物、帽子、タオル、筆記用具
- 申込期間 7月1日～8月7日
（定員になり次第締め切り）

- 問い合わせ 長野県環境保全研究所
電話：026-239-1031 FAX：026-239-2929
Eメール：kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp
- 申込方法
ながの電子申請サービス（長野県）で受け付けます。
下記のURLまたは二次元コードにアクセスし、申込みをお願いいたします。

https://apply.e-tumo.jp/pref-nagano-u/offer/offerList_detail?tempSeq=71667



野外活動講座 石ハカセをめざそう！

当館の専門員を講師に、石についてくわしく解説する野外講座です。

- 主催 長野県山岳総合センター
- 共催 市立大町山岳博物館
- 期日 令和8年9月27日（日）
- 申し込み 要事前申込
- 問い合わせ 長野県山岳総合センター
電話：0261-22-2773 FAX：0261-22-5444
Eメール：info@sangakusogocenter.com

山岳資料「アルバム」と図書資料 をご寄贈いただきました

令和8年2月5日(木)・19日(木)



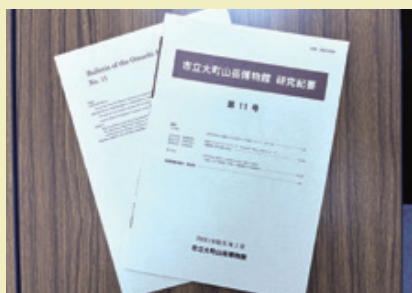
このたび、大町市内在住の個人の方から、山岳資料「アルバム」1点と図書資料2点を続けて当館へご寄贈いただきました。

今回寄贈を受けた資料は寄贈者の親類の方が旧蔵していたものです。アルバムには大正・昭和初期に北アルプスで撮影された写真も収められ、百瀬慎太郎の山姿が写るものもあります。図書資料は、折井仲三郎編『信濃鐵道史』(信友會、1940)、鈴木善作編『地方發達史と其の人物 長野縣の巻』(郷土研究社、1931)という書籍で、いずれも昭和初期に非売品として出版され、関係者のみに頒布されたものと思われます。

これらを含め、当館収蔵の山岳図書資料を閲覧希望の方は事前にお問合せください。

『研究紀要 第11号』を発行 しました

令和8年3月31日(火)



博物館活動や北アルプスの自然史と山岳文化史などの調査研究に関する学術的な論文・報告等を掲載する刊行物『研究紀要』第11号を刊行しました。

今号は「大町市周辺に露出する大町テフラ層について」、「飼育下におけるライチョウの育雛期の摂食量の変化」、「大町市内に現存する近世の山伏に関する資料」の地質・動物・人文科学の計3つの分野の資料を収録しています。

研究紀要はバックナンバーを含め、全文をオンライン版として当館公式ウェブサイトならびにJ-STAGE上でも公開しています。ぜひ、ご高覧の上、ご活用いただければ幸いです。

「山のサイエンスカフェ in さんばく2026」を開催しました

令和8年3月8日(日)



当館の学芸員や専門員が日頃行っている調査研究の内容や収蔵資料に関する情報について、具体的な内容を市民や地域住民にお伝えする研究報告を毎年行っています。

報告内容は、「大町の外来種と市民科学(岡本真緒)」、「高山植物の花の工夫—自家受粉を避けるさまざまな戦略—(千葉悟志)」、「大町テフラの噴出源を訪ねて(竹村健一)」、「大町市内に現存する立山信仰に関する史料(関悟志)」の4つでした。今回は、「カフェ」の名称のとおり、湯茶を飲みながらの形式で行い、報告後は、参加された方とざくばらんに語り合う時間も設けました。当地域の自然や文化に対する情報や疑問点などを知る良い機会となりました。

「2026 さんばくフェス」を 初開催しました

令和8年5月5日(火・祝〈こどもの日〉)



5月の大型連休中、当館で初となる催し「2026さんばくフェス」を行いました。

当日は、学芸員・専門員が常設展の各展示コーナーをスポット的に案内・解説する「スポットガイドツアー」、各分野の収蔵庫を案内・説明して回る「バックヤードツアー」のほか、常設展にちなむクイズに挑戦する「さんばくクイズラリー」を実施しました。また、館内には来場記念の写真撮影できる「さんばくフォトブース」を終日設置。

この日の来館者は250名を超え、友の会サークル「ボランティアの会」協力のもと開催したこの催しには延べ300名以上の参加者があり、博物館に広く親しんでいただく大変良い機会となりました。

「バックヤード見学会」を開催 しました

令和8年3月22日(日)



市内の小学校再編による新校開校にともない、大町地区の小学校2校の春休みが例年に比べて長期間となることから、春休み期間中の市内小学生とその保護者を対象とした参加体験型の催しを開催しました。

「春休み 小学生・保護者向け バックヤード見学会 —博物館の裏側をのぞいてみませんか?—」と題したこの催しには、2組6人にご参加いただき、普段は一般の観覧者が立ち入ることのできない収蔵庫などのバックヤードを学芸員・専門員がご案内しました。展示室からは見えない博物館の裏側をご覧いただき、博物館活動における資料収集保管の重要性を知っていただく機会となりました。

大町の水の学校SDGs 探求学習 旅行プログラム

令和8年5月19日(火)



東京都所在のむさしの学園小学校6年生の児童20名が来館し、大町の水の学校SDGs探求学習旅行プログラムに沿って館内を見学しました。大町市はSDGs未来都市に選定されていることから、山岳博物館では、SDGs共創パートナーシップ「みずのわプロジェクト」の取り組みに参加しています。今回は、北アルプスの自然環境を学んでいただくとともにニホンライチョウから自然環境の変化を考えていただきながら館内および付属園をガイドしました。

東京都と長野県(大町市)の違いや自然環境の変化などについて学んでいただく機会を提供できていたら幸いです。

人事異動のお知らせ

このたび、当館職員に次の異動がありました。

令和8年3月31日付け

《退職》 降旗 孝浩（事務員）
渡邊 咲晴（飼育員）

令和8年4月1日付け

《新任》 坂井 征洋（館長 兼 教育参事）
※教育委員会生涯学習課から転入
（前任 生涯学習課長 兼 教育参事）

小林 花菜（飼育員）
※新規採用

藤澤 浩紀（主幹）

※会計課から転入
（前任 会計課 会計管理者）

このほか、昨年度、有識者としてご指導いただきました、鈴木啓助名誉館長は令和8年3月31日をもって退任されました。

さん ぱく 山 博 友 の 会 だ よ り

当会またサークル4団体（ボランティアの会・烏帽子の会・花めぐり紀行・山岳文化研究会）の活動は、博物館公式HPでご覧いただけます。

総会記念講演会

「北安をアーカイブする

—忘れられた実業家・横沢本衛を追う—」

大町山岳博物館友の会では、4月12日（日）に令和8年度総会記念講演会を開催しました。当日は、友の会会員のほか一般の市民・近隣住民の皆様方を含め、41名の参加がありました。

記念講演会では、松本市文書館専門員の木曾寿紀さんを講師にお招きし、大町市や北安曇郡内の大北地域における近現代史にスポットをあててご講演いただきました。「北安をアーカイブする —忘れられた実業家・横沢本衛（よこさわ もとえ）を追う—」と題し、明治時代以降、安曇電気の設立や北アルプスの大黒鉱山への経営参加などを行い、地域のために尽力した白馬出身の実業家・横沢本衛について、これまでの調査やご研究にもとづき、豊富な資料をお示しいただきながらご紹介いただきました。自分たちが暮らす地域の歴史への理解を深める大変良い機会となりました。



「博物ハイキング —木崎湖編—」

友の会主催事業として、5月10日（日）に仁科三湖のひとつ木崎湖をフィールドにした「博物ハイキング —木崎湖編—」を開催しました。この催しは、昨年度に「博物ハイキング —大峰西麓編—」と題し、大峰の西麓をフィールドに開催した観察会のシリーズ第2弾として企画・開催されたものです。前回に続いて今回も好評で、役員含め19名が参加しました。

当日は好天に恵まれ、信濃木崎夏期大学の駐車場を出発地点にして、湖を東側から西側へ向け、ぐるっと一周して歩きました。途中、参加者同士で、各自が得意とする分野の説明をしながら、野鳥、草花・樹木、地質・地形などの自然や周辺の歴史について、会員相互で学びあいました。新緑の時期、湖からのさわやかな風を感じながらの充実した一日となりました。



編集・発行



—創立 1951 年—

〒398-0002 長野県大町市大町 8056-1
市立大町山岳博物館 編集責任者 坂井征洋
TEL. 0261-22-0211 FAX. 0261-21-2133
✉ E-mail: sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL: https://www.omachi-sanpaku.com

2026

夏 号

第 71 巻 第 2 号

発行日 2026（令和8）年6月25日

印刷 有限会社北辰印刷
〒398-0002 長野県大町市大町 3871-1
TEL. 0261-22-3030 FAX. 0261-23-2010